関山

かんざん

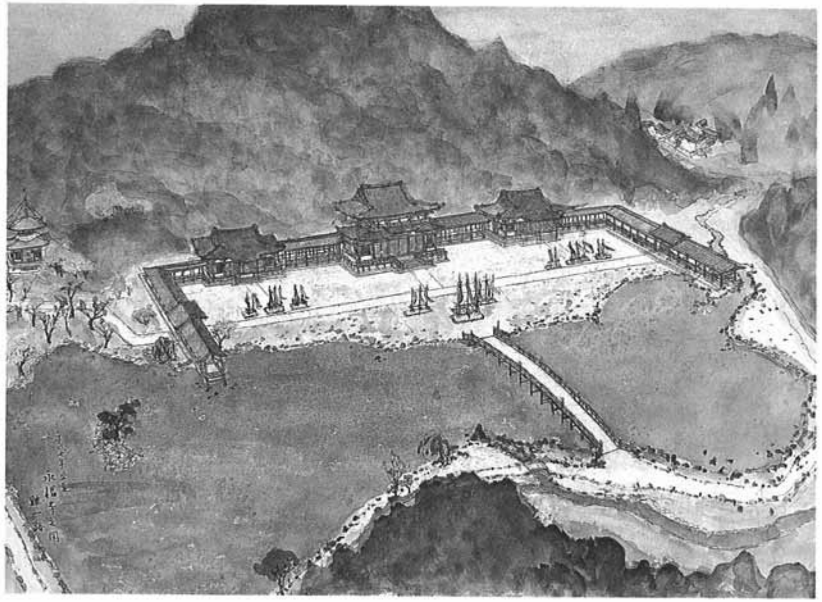
第2号

寺報　中尊寺

目次

法は人によって伝えられる　貫首　千田　孝信　2
時報ぐらびあ　4
永福寺復元図解説　藤島亥治郎　9
「鎌倉彫と秀衡塗展」　後藤俊太郎　10
賤の小田巻　野尻　政子　12
鎌倉と日光　千田　孝明　14
金色と花　安達　瞳子　17
いま　何が問われているか　佐々木邦世　21
「塔婆について」　佐々木秀円　28
関山植物誌〈2〉　清水　秀澄　31
平泉・文学散歩〈1〉西行歌碑　土岐　善麿　32
今　春聴大僧正の晋山　菅原　光中　35
天台会（霜月会）　破石　澄元　37
境内菜園　千葉　快恩　39
風信／語録　40
執務日誌　42
浄財御奉納者御芳名　50

〈表紙「関山」　貫首染筆〉



永福寺復元図　藤島亥治郎画　解説9頁

中尊寺薪能「実朝」

法は人によって伝えられる

貫首　千田孝信

今、わが国の政治・経済・社会・自然環境・精神状況の全般にわたって、見通しの定かでない漠然とした不安が、人心をひそかに揺がせている。

なかでも、今年頻発した一連の不祥な事件を契機として、「真の宗教とは何か」の問いかけが、今後益々高まってゆくであろう。

いうまでもなく、仏教永遠の原型は釈尊の出家と修行と悟りと大衆の救済にある。釈尊が出家ののち、六年に余る難行苦行を重ねられたきびしい修行こそ仏教の原型であって、わが天台の宗祖伝教大師の「止観・遮那」業も、曹洞宗の開祖道元禅師の「只管打坐」行も、みなこれに基づいている。

初期のオウム神仙の会も、ヨガ行で十万回の五体投地礼拝を義務づけたというが、この厳しさが、若い真面目な信者を魅きつけた一つの誘因であったろう。外界情報を遮断した主体的な禁欲克己の集中的修行が、神秘的霊的高揚をもたらし、そこから超人的神通力が体得される可能性もないわけではない。しかし、これはごく少数のエリートのみが到達できる聖道門である。麻原も単なる脱落者のひとり、いや傲慢不遜な一犯罪容疑者に過ぎなかったのである。

釈尊の偉大さは、苦行による超人的神通力の体得を必ずしも望まれなかったところにある。釈尊が希求されたのは、あくまでも人生と宇宙の哲理の深い知的な認識と、その認識に基く日常生活における慈悲の実践であった。透徹した知的認識を妨げる煩悩の滅却を強調されたが、それ以上に強調され

たのが、自他の生命の尊厳と慈悲の体得実践であった。

わが国に伝来した大乗仏教は、この釈尊の基本的志向を益々深化させていった。聖道門に対して、易行門の浄土系の仏教が生み出された。選ばれた少数のみが到達できる法悦に、いったい何の意味があろう。無知愚昧の凡夫が仏の広大な慈愛の法悦に浴することができる「信」の可能性をひたすら追及し、その証しを立てたのが、浄土門の法然・親鸞・一遍上人たち、あるいは法華ひとすぢの日蓮上人であった。このような日本仏教の自力聖道門・他力易行門の両面の深化によって初めて、仏教は国民大衆の身近かな「心の拠りどころ」となったといえよう。

日本仏教教団の実態は、「高く悟って俗に帰る」歴史であった。仏教伝来以来千四百年。いわゆる既成教団は、教理法儀の忠実な伝承に努める一方で、広汎な大衆の年中行事や葬儀儀礼という日常慣習化した世俗のなかに埋もれ、日本の風景・風土そのものとなってしまった観がある。

この故に、全国津々浦々の寺院・堂塔・仏像・庭園あるいは無数の野仏たちが湛えている「静寂と安らぎ」は、日本庶民のつつましい仏への信仰が、幾世代をかけて熟成したものであって、決して一朝一夕の哲学と美学で成ったものではなく、また一朝一夕にして滅びるものではない。

しかし、法は人によって伝えられるといわれる。その仏法を伝えるべき人間の在りかたこそが、今問われているのだと思う。自重自戒する所以である。

わが藤原清衡公が、官軍夷虜・毛羽鱗介を問わず、冤霊の鎮魂と天下万民の福祉のために中尊寺の堂塔を建立供養された発願の意図は、まさに仏教正統の知的な認識と慈悲の実践そのものであった。

平泉開府九百年。清衡公のこの高い祈願を、われわれは後世に伝えてゆかなければならない。

寺報　ぐらびあ

＊阪神淡路大震災慰霊法要

……二月一日

一月十七日未明、阪神地区に大震災発生。中尊寺では、死没者の慰霊法要に、五千四百人の名簿を作成して、二月一日追悼法要を厳修した。名簿は、一山の僧侶・職員が本堂に写経机を並べ、新聞の犠牲者名簿を見ながら一人一人の名前を書き写した。新聞には毎日死没者が追加記載されるので、記帳も追加。

法要には、芦屋市で被災し一関市弥栄の実家に子供三人と避難している蔵本裕子さんの姿も。「娘の級友も犠牲になった。いてもたってもいられず参列した。犠牲者に心からご冥福を祈りたい」と、焼香の列に加わった。

寺では、若い僧侶が、去る二十二日と二十九日に一関市内で義援金を募る托鉢も行った。

＊「重文」に新たに二件

……六月十五日

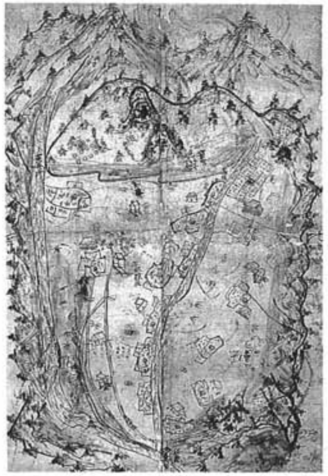
〔彫刻〕　木造騎獅文殊菩薩及び脇侍像

〔古文書〕　「中尊寺文書」（六十八通と関連文書五通）及び陸奥国骨寺村絵図」（簡略図・詳細図・紙背図）

以上の二件が国の重要文化財に指定された。騎獅文殊と脇侍像は現経蔵の本尊像で、中国五台山の様式を汲む「文殊五尊像」の最古例。京仏師の作とみられ、浅い彫りに気品を感じさせる。水晶「玉眼」の早い例と

しても貴重である。

中尊寺文書と（経蔵別当領）骨寺村絵図は中世奥羽における代表的な寺院文書で、在家など村落の様相を知ることができる。



＊平泉・九百年祭…四月～十一月

鎌倉との新たな交流を求めて…

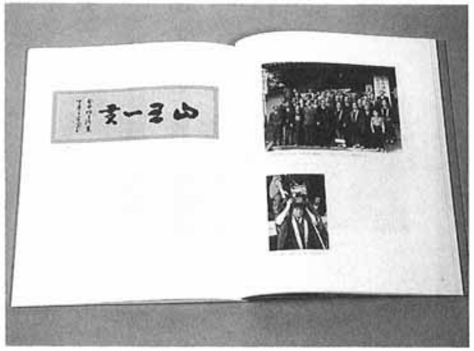
平泉町は、今年開府九百年を記念して去る四月三十日から十一月までの長期にわたり、多彩な行事を催行している。

平泉の長期イベントは恒例になっている。

今回も、文治二年（一一八六）に、鎌倉の源頼朝公から平泉の秀衡公に宛てて「御館は奥六郡の主、予は東海道の惣官なり。もっとも水魚の思いを成すべきなり」（吾妻鏡）と、書簡を送ってきた故事を引いて大祭の柱に。中尊寺資料館では「鎌倉彫と秀衡塗展」に引き続き、「鎌倉永幅寺遺物展」を十一月十二日まで開催している。本展のために、藤島亥

治郎先生に特にお願いして「永福寺復元図」を描いていただいた。（九頁・解説参照）

藤島先生、九十六歳。今夏の異常な暑さの中での彩管執筆、明治の方は偉大である。



＊薗大僧正の遺徳しのぶ　……七月一日

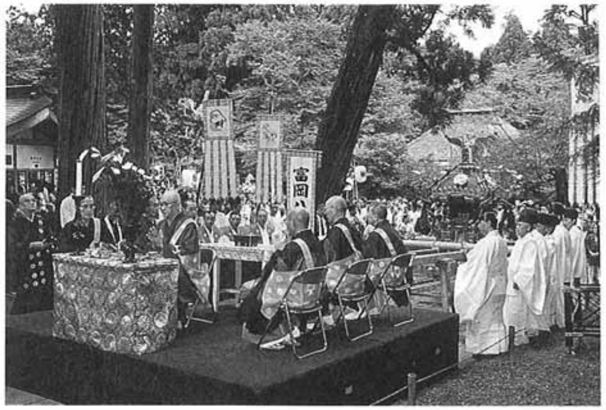
終戦の年から十八年間、貫首として中尊寺苦難の時代を乗り越えて今日の基礎を築かれた薗實圓大僧正の三十三回忌法要を厳修。

「遺影遺墨あるばむ」も上梓され、一山と町内関係者集って故師の遺徳をしのんだ。

＊秋篠宮ご夫妻がご見学　……七月二十八日

全国スポーツ少年大会開会式に出席されるご夫妻がご来山。千田貫首がご案内した。

町民や観光客が歓送迎。警備が少々過剰のように思われるが、時節柄止むを得ないか。



＊新作能「実朝」を披演　……八月十四日

中尊寺薪能も、今年は平泉と鎌倉との交流にちなんで番組を構成した。能「実朝」（香川靖嗣）は、昭和二十五年に土岐善麿氏が構想・作詞、先代喜多宗家実師が振り付けした新作能。これまで東京で三度ほど披演されたことがあるだけで、同じ年に同じ喜多・土岐両氏の創作になる「秀衡」が中尊寺で度々演じられてきたのとは好対照。壮大な「大海の舞」に、観客は魅了された。

＊お神輿渡御（とぎょ）…………九月三日

平泉祭の主眼である。関八州の代表として東京富岡八幡宮の神輿を迎え、地元の三市町の神輿とともに三キロの道のりを渡御。

はじめて見る豪快な水掛け神輿に、沿道の人も興奮に酔いしれた。

八幡神は源氏の氏神。清衡公が奥六郡を領し、奥羽統治の機を得たのも、源義家公に与（くみ）したからで、源氏との係わりは深い。

神輿は、表参道月見坂を一気に登る（表紙）。

四神旗が平泉の秋空に翻ったのは、一二世紀以来のことである。

＊セミナー「東方」……十一月五日

平泉文化会議所主催。六月の第一回セミナーは、上横手雅敬氏・芹沢俊介氏・山折哲夫氏が毛越寺会場で講演。二五〇名が熱心に聴講した。

第二回は、大隅和雄氏が「歴史と文学の間」、鎌倉文学館長の清水基吉氏が「道の奥と遊行者たち」、作家辻　邦生氏が「西行と秀衡」について講演。会場は中尊寺。

大隅氏

清水氏

辻　氏

鎌倉永福寺復元図

〔雅一路〕　藤島亥治郎　画

□今年の平泉祭の一環として、「鎌倉永福寺遺物展」の企画者から鎌倉市教育委員会による遺跡調査の成果に基づく復元図の依頼があった。急な話ではあったが、私は平泉寺院の遺跡調査を永年手がけてきた関係上望むところである。源頼朝が平泉諸寺、特に二階大堂のすばらしさに感激し、文治五年鎌倉に帰って間もない十二月九日に事始めをしたほど。数年後に完成した永福寺は中尊寺・毛越寺の荘厳と苑池にならったという。それに若い時から深い関心を寄せ、発掘現場に赴き、調査結果を知悉した私である。早速依頼に応じ、創建時の姿に復元したのがこの図である。

□寺域は鎌倉市二階堂の東西山丘間の広い谷間に在り、その東半を占めた瓢箪形の苑池に向かう東向きの三堂と、これを連らねた南北廊の先が前に折れた翼廊となって池汀に及ぶ。三堂の中、中央堂が一きわ大きい二階堂で本尊は釈迦らしく、北が薬師堂、南に阿弥陀堂を配し、南翼廊の先に釣殿があり、北翼廊の先に遣水（やりみず）を通したこともあった。

鎌倉時代から南北朝末に焼失するまで、四期にわたり建築・苑池の変改が多く、苑池は次第に狭くなった。池汀には多くの景石の置かれた州浜であった。堂前には五色の幡幟が翻っていたらしい。

□二階堂前に架した橋は池が狭くなるに応じて短かくなった。しかし、橋の中間の中島はなかった。

□橋の東南方に特に大きな景石が立ち、姥石といって来た。これこそ『吾妻鏡』に畠山重忠が一人で一丈ほどの石を担ってここにドサッと据えて、人々が感じ入った石といわれる。近くに滝口が発見された。

□南方（図の左方）は広い平地で、桜・梅・松など林をなした。歴代の将軍や執権が参詣に遊覧を兼ねた勝地で、尼将軍政子や風流人の実朝が度々苑遊したことが『吾妻鏡』に見える。

その先に描かれた多宝塔は源頼家の乳母の夫源義信が亡妻の追福に建てたもので、その近くに南大門があったが、まだ発掘されていない。

□子院は、西山の谷を上がった所にかつて二棟ほど発掘調査されているので、図の右上の先に象徴的に描いておいた。

平成七年八月朔日　誌

（東京大学名誉教授）

「鎌倉彫と秀衡塗展」

後藤俊太郎

岩手県平泉町においては、去る四月三〇日から七ヶ月にわたって「蘇れ黄金・平泉祭、古都平泉―九百年の道」とタイトルした一大イベントを行っている。開催に当たっての平泉町長の「共生の時代に」と題した挨拶によれば、清衡がこの地に館を構え、平泉が歴史の舞台に登場してから九百年。しかしあの頼朝と義経の確執以来、鎌倉との間に正式の交流は今日まで全く無かったという。八百年前の歴史上のわだかまりを廿一世紀まで持ち越したくない。これからは互いに連携し共に栄えていきたいというお話は、鎌倉の人間としてはいささか驚きであった。竹内鎌倉市長も同じ驚きを感じられたという。竹内氏はこの日、毛越寺の講堂で「歴史的遺産と町づくり」と題して特別講演をされ、平泉の聴衆に深い感銘を与えた。金色堂の学術調査が一九五〇年に行われ、藤原三代の棺が開かれた時、大佛次郎氏は鎌倉から持参した早咲きの彼岸桜の大枝を柩に手向け、それが当時の平泉の人々の心を強く打った。竹内市長はそのエピソードもご存じで、今回の記念に大船フラワーセンターで改良された、新種の玉縄桜の苗木を贈られたのも、まことに時宜を得て素晴らしいことであった。オープニングには市長のほかに八幡宮の白井宮司、大仏の佐藤副住職、鎌倉彫からは伊志良館長と私が出席した。

多彩な催しの一つとして中尊寺資料館で『**鎌倉彫と秀衡塗展**』が八月二〇日まで開催されている。鎌倉彫資料館からも古典を四三点ほど出陳しているが、何といっても注目すべきは、中尊寺地蔵院の**椿蓬莱文の笈**と円乗院の**宝相華文光背残闕**の本物を間近で見られる事だろう。鎌倉ケーブルテレビでも鎌倉彫シリーズの一環としてこの催しをとりあげ、三橋教授会長が同行して会場での平泉町長とのインタビューや秀衡塗の翁知屋工房を訪問取材をされた。展覧会はまだ日があるし、十一月十二日まで平泉郷土館で『柳之御所遺物展』があ

り、八月十四日には能楽殿で薪能が執行される。鎌倉と平泉の文化交流――という主旨に則して、能組にも「実朝」に狂言「鐘の音」が組まれた。

特に「実朝」は、昭和二十五年に土岐善麿氏の構想・作詞に、宗家の喜多実師が振付した新作能で、いまだ鎌倉でも上演されたことがない。それを中尊寺の野外能楽堂で――。平泉の方々の意気込みが感じられる。

かつて頼朝は、毛越寺の再現を夢見て鎌倉に永福寺を建てた。今日の鎌倉彫がその永い歴史の中で、中尊寺ひいては平泉の文化や風土に、強い絆と親しみを持ち続けてきたことを、あらためて大切にしたいと思う。

（「鎌倉彫会館報」'95/7号より）

賤の小田巻

野尻政子

「賤や賤　賤の小田巻くり返し……のところえ来た時、どうしたことか袖を頭上にかざし扇を開いたまま、ただ胸にしめつけられるような悲しみにおそわれて、自分ながらどうにもならぬ涙がこぼれそうに。しばらくは動くこともならぬまま……」（著書「はん葉集」）武原はんさんは四十年前の衝撃的な体験をこのように述べている。

　昭和三十年、中尊寺能舞台での奉納舞のおり、お世話を一切されたのが執事長の佐々木実高氏であった。五十二年に故人となられたが、武原さんのそのおりの思い出話には今も必ず「実高さん」が登場する。また、私の父、大佛次郎も生前親しくおつき合いをさせていただいた。父は二十五年に朝日新聞社の学術調査団に加わって雪の金色堂に詣り、藤原三代の御遺体に鎌倉より持参した桜の大枝をお供えした。それ以来の御縁である。武原さんが当時は新幹線も無かった遠いみちのくにはるばると足を運んだのには父のすすめもあってのことに違いない。当時五十歳、常に「舞は心」を信条にしている武原さんが、義経を思う静の心になり切っての舞い姿は、さながらその霊が乗り移ったように美しかったことだろう。

　さて、この六月のこと、九十二歳になられた武原さんが、実に四十年ぶり新緑の中尊寺を訪れた。「もう一度、あの能舞台を見たい」との切なる願いが中尊寺佛教文化研究所主任の佐々木邦世氏の御尽力で実現したのである。邦世氏は実高氏のご子息、思えば中尊寺との御縁は深い。邦世氏はじめ、お寺の関係の方々に温かく迎えられた武原さんは、まず金色堂にお詣りを済ませたのち、いよいよ能舞台へ。もみぢの若葉が懸崖のように初夏の空をおおう境内、木洩れ日を浴びながら車椅子が進む。「あの日はなあ、桜が吹雪のように散っていた。こう、扇をかざすと、衣川が白く光ってなあ」と四十年前を昨日のようになつかしむ。

　正面に、すがすがしく清められた能舞台を目に

した時は「ああ、ありがたい！」と思わず合掌。建物にさえ切られて衣川こそ見えなかったが、長い歳月の重みに堪え、能舞台は昔ながらの変わらぬ気品を漂わせていた。支えられてそろそろと橋がかりを出た武原さんだったが、舞台に一歩をしるしたとたん、すっくと背を伸ばして一人で立ち皆を驚かせた。

　まず、毎朝東京六本木の自宅での舞台の習わしどうり、謡曲「翁」のひとふし「とうとうたらりたらりら」を朗々と謡って呼吸をととのえたのち、高々と手を上にかざして「賤や賤、賤の小田巻くり返えし……」を謡って四十年前を再現。みごとに決まった舞いの形に、十数人だけの〝観客〟から盛大な拍手が湧いたのも感動的だった。終りは静かに座って、静御前の霊に深々と手を合わせたが、白い頬には幾筋もの涙のあとが見られた。

　武原はんさんは、戦後間もなく、鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮にも「賤の小田巻」を奉納されている。厚い信仰心は、静御前、源義経さんの何よりの供養になるのではなかろうか。このたび平泉と鎌倉市に交流が生まれ、秋より来年にかけてさまざまな催しが行われるという。今回の武原はんさんの中尊寺訪問にも、なにか深いご縁を感じられてならない。

（鎌倉　雪ノ下）

鎌倉と日光

千田孝明

源頼朝が開いた中世の都鎌倉には、早くから三大寺院として格式づけられた寺院があった。第一に鶴岡八幡宮、第二に永福寺、第三には勝長寿院である（永福寺、勝長寿院ともに現在廃寺）。鶴岡八幡宮はいうまでもなく京都石清水八幡宮を勧請し源氏の氏神として第一に崇敬された神社であるが、多くの供僧で組織された実質上の寺院であった。永福寺は、別名二階堂といって、頼朝が奥州遠征で平泉文化に圧倒され、鎌倉に帰還後平泉の大伽藍に模すべく威信をかけて造立した浄土式庭園を備えた寺院である。そして勝長寿院は頼朝の父源義朝の菩提を弔うために建立した寺で鎌倉大御堂とも呼ばれていた。いずれも頼朝にとって重要な寺院である。

この第三の寺院である勝長寿院の院主が、実は十三世紀から十五世紀のころまで代々日光山の別当を兼ねていたことは、あまり一般には知られていないことであろう。

◇

天平神護二年（七六六）勝道上人の開山にはじまると伝えられる日光の歴史は千二百年余にも及ぶが、案外その中で地味な時期として一般に理解されていないのは中世期の日光である。まして、鎌倉と日光を結ぶものについては語られることは少ない。しかし、先に紹介したように古都鎌倉と霊場日光山との接点は極めて深いのである。

鎌倉は源頼朝によって開かれた中世の都であり、源氏の夢と野望の花を開かせた地である。その源氏と日光の関わりは既に頼義の奥州遠征に遡れるが直接の関わりは頼朝の父義朝の時にはじまる。『兵範記』には、源義朝が保元元年（一一五六）十二月九日に日光山の造営の功績により下野守を重任したことが見える。東国を基盤として伸長した源氏にとって日光山は特に崇敬すべき霊場として意識されていたのである。

源頼朝は、父のそうした事績をふまえ、日光山

への信仰と保護を強めている。『日光山満願寺祈請感応条々』によると、治承四年（一一八〇）、頼朝が伊豆で挙兵したとき、大願を発して朝敵誅伐を祈願し、大願成就の後、下野国内の久野・大井の地を日光山の燈明料所に寄進している。また元暦元年（一一八四）平家追討のため日光山に祈願し、所願成就の後五月会の会頭を下野国の地頭・家人らの所役と定めている。そして、文治二年（一一八六）、頼朝は日光山常行堂に三昧田として下野国寒河郡内の地十五町を寄進している。

その後同五年、平泉の藤原泰衡追討のための奥州遠征にあたり戦勝祈願の願文を日光山に捧げ、安達藤九郎盛長を日光山に遣わせた。一番最初に門を開けた坊に祈祷を託せよとの命によってこの時願文を受け取って戦勝祈願したのは三融坊静覚という僧侶であったという。平泉から凱旋した後、日光山への報賽のため頼朝は太刀を奉納し、下野国那須庄内の五箇郷を神贄狩料所として、森田・向田の二郷を日御供料としてそれぞれ寄進している。そして、願文を受けて祈祷した日光山三融坊静覚を功により別当に補している。

◇

このように源氏にとって日光山は祈願成就をかなえる聖地という独特の崇敬を受けることになり、以後日光山と源氏の根拠地である鎌倉とは直結のラインがしかれるのである。即ち日光山の別当には鎌倉側からの要請に基づいて就くことが通例化した。頼朝の従兄弟（甥との説もある）である観纏を日光山別当に送り込んでいるのはその端的な現れである。また、観纏に相前後して鶴岡八幡宮の供僧である真智坊隆宣が日光山別当を兼ねている。さらに隆宣の実弟の弁覚が別当を引継ぎ、鎌倉で活躍する兄隆宣との緊密なる連携で日光山の堂社の整備や山岳信仰の拠点としての新たな教義の確立を行い日光修験の基礎を敷いた。日光山中興の祖と評価されている所以である。この隆宣・弁覚兄弟はともに祈祷に優れ、個人的に頼朝や三代将軍源実朝に信頼され重用されたという。

そして彼らの後、代々日光山別当についたのが、先に述べたように勝長寿院の院主であった。寺伝

によれば二十六世日光山別当尊家以後三十七世別当持玄までは、鎌倉大御堂勝長寿院の院主が日光山別当を兼務し、鎌倉に常住しながら日光山の寺務を執りしきっていた時代が続いた。しかも彼らの出自は、皇族ないし藤原摂関家、及び足利家などの貴種であり、京都本覚院門跡などを歴任し、中には後に天台座主に上任された高僧もいると伝える。鎌倉における格式の高い寺院として勝長寿院は室町期まで存続したのであった。

日光山輪王寺常行堂
（頼朝堂と通称されたと伝える）

◇　◇

日光山の常行堂は古来頼朝堂と呼ばれ親しまれていたが、東照宮建立の際移転を余儀なくされ、その常行堂の旧地付近から頼朝御遺骨の納まった中国船載の青白磁の骨壷が出土し、天海大僧正の命で直ちに常行堂に安置され、現在にいたっていると伝えられている。また、常行堂には頼朝と実朝が納めた皆水晶念珠が古来宝物として伝わっており、源氏の祈祷所ないし菩提を弔う御堂としての性格は密かに連綿として伝えられている。

江戸時代に入り、東照宮造営によって新たに徳川家の霊廟を護る日光山、そして輪王寺宮門跡による上野寛永寺と日光山輪王寺の兼帯という構造の祖型は、実はこうした中世の日光山と鎌倉、源氏との関係に見いだせるのである。

慈眼大師天海大僧正の脳裏に、日光山及び源氏徳川家の再興の夢が託されていたように思えてならない。

（日光　観音寺住職
栃木県博主任調査員）

金色と花

安達瞳子

東京生れの私は、雪の怖しさを知らない。だからだろう。その美しさに憧れて、後からあとから降り続く雪の奥を見定めようと目を凝してしまう。どうしても見えないのが不思議だった幼い頃の思いが、今も続いているのだ。

「ワッハハ。じゃ君は何んの花を選ぶ?」

突然一人の男性の笑貌が現れる。権大僧正として中尊寺貫主をつとめられた今東光先生だ。当時の先生は、毎週女性を招いて対談されるテレビ番組を持って居られ、天衣無縫の毒舌が話題だった。私の番が巡って来た時、悪友達が口を揃えてベソをかくなよと嚇すので、心配になって先生の小説、直木賞受作品『お吟さま』を開いた。そして次第に、次々に登場する茶の湯の席の花と器の取り合わせの妙に引き込まれて行った。

しかし一ヶ所だけ〝時花〟—季節の花を入れたとか綴られていないことが気になって来た。秀吉が黄金の茶室を建てた時、お吟さまに茶を点てさせるいわばクライマックスとも言える場面なのにだ。

「なぜ、あそこだけ時花なのです?」

窮追されたらそう質問しようと心に決めた私は、当日身を固くしてスタジオの席に着いた。が、先生は終始お優しく、時を逸したまま番組は終ってしまった。ちょっと残念な気がして帰り際に伺った時、間髪を入れず逆襲されたのだ。

畳も天井も襖も、そして茶道具のすべてが黄金づくしの席に挿す花は難しく、私は絶句した。松の緑も白玉椿も映えようけれど、拙い入れ方ではのまれてしまう。そんなことは百も承知で先生は、読者それぞれが自由に思い描けるよう、あえて時花とされたのだろう。

あれから三十年余りの歳月が流れたのに、雪空にその時の先生のお声が山彦するのは、中尊寺の金色堂に供花する花は何だろうという思いが横切るためだろうか。

供花―〝仏様の花〟と言う時、街々の花屋は、明日散るかも知れないほど満開の花を幾種か混ぜた派手な花束を作って店頭に並べる。安直で画一的なのだ。売る方も買う方も、いったい何時の頃から、そんな在家の仏壇の花が習慣化してしまったのだろう。

『絵因果経』に見る地神が菩薩に花盤を献じている場面の花は、蓮の花首だけが盛られた左右対称の姿だ。しかし、仏教の信仰が深まるに従って日本人は、渡来時そのままの形式的な供花に満足せず、少しづつ意匠をこらし始めた。『鳥獣人物戯画』に描かれた蓮は、開花と蕾が長短三本さり気なく左右非対称のつりあいを保ち、時空間の流れと拡がりとを滲ませていることに気付くからだ。また、『慕帰絵詞』の桜は、三具足の押板の中央に置かれた青磁の瓶に丈高く立てられ、春の盛りを謳っているし、『春日権現験記』の紅葉は、香や灯から独立して部屋の一隅に移動し、秋を奏でている。

これら文献から、花道が仏教の供花から始っていることは明らかだ。しかしそれだけではない。多様な植物と四季の変化に恵まれた風土の中で、農耕民族として自然中心的な生活を営んで来た土壌があったから、供花に創意工夫を重ねて、生活芸術としての独自の芸道に育てたと言えよう。

日本人にとって花は、装飾のための素材ではなく、生命の象徴だ。だからこそ心して供花し、暮しに拡げもしたのに、今日の在家の供花は……と思うと哀しくなる。

話を雪に戻さなければならない。黄金の御堂や茶室に挿す花を選ぶのは難しいが、もっと難しいのは、雪の日の花だ。花道の伝書は、赤い花や実

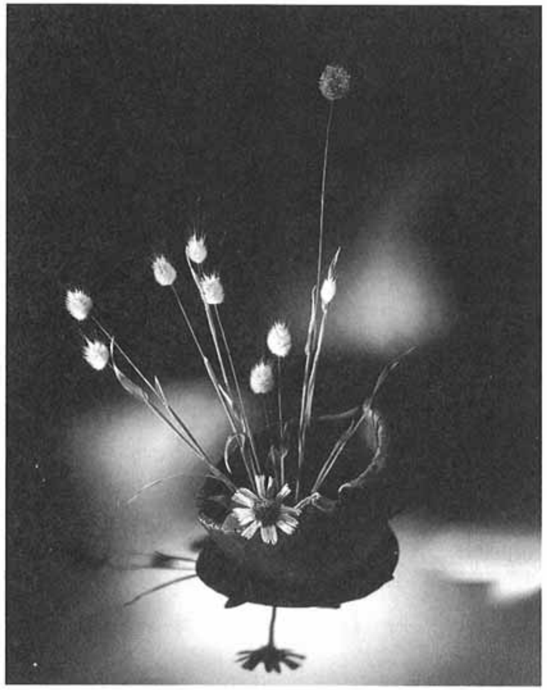
を捜せと綴っているが、茶道では、雪見の席に水ばかりを張った器を床に置いて花とした武野紹鷗がしばしば話題になる。後者はほどよく雪の降る地域ならでは。しかも一回限りの創意だろう。

『万葉集』には雪を白梅に見立てた歌が多い。雪を待ち消えるのを惜しむ気持は、花と同様、豊饒をもたらす前兆としていた農耕民族の習慣、雪と人間との素朴な交歓―「素」の時代だ。『枕草子』にもさまざまの花が登場する。雪を器に盛り、月明りで白梅を立てられた村上天皇に〝雪月花のとき〟と奏した蔵人の伝聞から、雪を「美」と見たのは貴族文化に入ってからという思いを強くする。戦国の乱世に梅は退き、〝銀椀裏に雪を盛る〟禅語を引くまでもなく、雪は「無」だ。町人文化の近世は一転して享楽的に展開する。例えば歌舞伎。舞台に雪布を敷き、黒子ならぬ雪衣が飛び交って三角の紙片をとめどなく散らす雪景色の視覚的演出。そのしつらえは大がかりで、大道具方に祝儀が配られたと聞くから、哀れを誘う道行も舞台裏は陽気で活気に満ちた「楽」の時代だったのかも知れない。

思えば水資源としての雪を、こんなにも美意識として時代ごとに追究して来た民族は、他国に類を見ないのではあるまいか。ならば現代の雪はと思い巡らすと、反射的にスキー場が目に浮ぶ。雪山に挑戦するのも、一つの能動的な行為だ。都市の除雪も発達した。有難いことだが、人間の快楽のためにみんなで雪を汚したり蹴散かしているように感じ、「穢」の時代に入っているようで反省させられる。

見詰めてもみつめても暗く遠く、源の捉めない銀色―いえ、灰色で深淵な未知の世界が今の私の雪だ。雪も花も、結ばれては消える自然のいのちの一瞬の輝きだから、雪を見据えて初めて、春の花が咲くのだということを、今東光先生に私は教えていただいたような気がしてならない。

（花芸安達流）



・花材　ウサギノシッポ・ウサギギク
・器　陶（長倉翠子作）
・作　安達瞳子

・花材　カエデ・ノジギク
・器　たらい
・作　安達瞳子

いま 何が問われているか

佐々木 邦世

〔「死」は向こうからくるもの〕

昨年の十月、岩手保険医協会の総会が盛岡で開催された。その際に、仏教における死生観といった観点からの講演を、と依頼された。

生き死には、人間永遠の現在（いま）の問題である。折々には、そうした関係の『本』を掌にとって読む。仏教書のなかにあるいは日本人の習俗・思想のなかに、また実際に接した老先生の晩年の姿に重ねて、思いかつ考えながら、結構こだわってきたように、自分では思っていた。

そこに、平成四年一月「脳死臨調」答申があってからは新聞や雑誌の論説に触れて、それとの絡みで考えさせられてきた。何だこれは、と疑問に思うから、当然そうなる。

「脳死は人の死であるかどうか」それ以前の問題がある。脳の死をその人間の死と〈見なす〉とか、そういう認識こそが科学的であるかのごとき〈常識〉、そして臓器移植を推進したいと考えている医師がきまって言う「欧米ではすでに――」「医学・医療の進歩発達のため」の科学至上主義、それに追従する風潮に本質的に疑問を感じるし、またこの先どこまで行くのかも危惧される。患者の必要に応じるのが愛であり善であるかのような論だけで果たしていいものか、社会的合意などには程遠く思わる、昨今である。

そういう疑問を、普通一般の人間の感覚で、あるいは科学者の認識・志向からは対蹠的な位置にあるかも知れない日本的・仏教的・習俗的な関心から、医療現場の先生方に聴いてもらえる。しかも、総会の記念講演という場を設定してくださるというのであるから、ともかくお引受けした。

〈話〉はまず、金色堂内に遺存する藤原清衡公・基衡公・秀衡公の三体の永久保存遺体（ミイラ）と、四代泰衡公の一個の首級について、昭和二十五年調査直後の報告書と、調査から四十五年後にして昨年漸く公刊できた最終報告書との内容の比較・展開や、当時得られたデータから今日の科学はどういう情報を読みとったか、などに触れて成果と問題点を拾って紹介した。

「ところで一体」と話をかえ、なぜ死体を永久保存しようとしたのでしょうか。生と死、清衡にとってまた秀衡にとって、その生の時間はたかだか七十年で、死んでからが八百六十年あるいは八百年、これからもその状態が続くわけです。永久に遺体を、金色堂のなかに保存しようと意識した藤原父子ないし平泉の人々にとって、御館の「死」とは何だったのでしょうか。阿弥陀如来の浄土に往生を願った、欣求浄土、切実に祈った十二世紀の平泉の人々にも、そして現在のわれわれの感覚からしても一つ言えることは「死とは向こうから来るもの」という認識ですね、これだけは汲み取れるのではないでしょうか――。

　死と〈みなす〉などということは、どうなんでしょう？まして遺体（身体）は単に資材部品なんかでないでしょう。「死」を自然と歳月のなかで受けとめようとしてきた、そういう死生観、感じ方は日本人特有のものがあるようです。日常的に人間の「死」にかかわっているひとは、むしろ、死の重みが感じられなくなっている場合も、あるのでは。「死」は、肉体の腐敗であり精神の絶滅と、つまりゴミになるだけ、といった見方もございますが、それとは違った見方があっても、無論いいわけでしょう。

　家族の感情、日本人の感性でしょうか、「最期」は人生の大事なんです。感情なんて科学的じゃないですよ、でも、そんなに何でも科学的でなければいけないものでしょうか。すでに西欧科学への懐疑ですね、ニュウサイエンスが言われて久しいわけで――。脳死や臓器移植についても、医学・臨床学などご専門の方々の中にも、まだまだ議論の余地があるのと違いますか。

　生きること、そして死をも含めて、その人その人の人生であります。生を諦める、徹底して観ると言うとき、生の底が死で、生と死は相対的なAかBかではなく、「生死」としてうけとめるのが、わたしどもの認識です。

　脳死法案を推進するための諮問答申や、専門医師だけにわたしたち一人一人の一生の大事を、一定の要件が確認されたなら「死と見なす」も何も、そんなことまで頼んだ覚えはないのですが――。

と、そこまで言って、社会的合意はこれから時間をかけて普通の人が実感として受入れることができる範囲に、その

合意の仕方を模索していく必要があるのでは、と結んだ。

　〔最近になって知ったのであるが、その一カ月ばかり後に読売新聞社が実施した世論調査によると、脳死容認が、前年比七・六ポイントも減少。「増えた慎重さを求める声」と。なお、柳田邦男氏はアンケートに「どちらともいえない」と「強いていえば」とした、迷っているひとが四〇・九％にも達すると分析して、是か非か二者択一の西洋合理主義では駄目だという論評を書いている。〕

　話の最後に、科学者は、現代はみな自然科学を信仰してきて、フッと気がついたら、本来的信仰の方にすでに免疫がないから、単純な信仰で一遍にガタッといかれる――と、たしか河合隼雄先生（臨床心理学）が何かに書いていらしたのを思い出して、付け加えたのであるが、これがどうも会場の先生方には消化不良をおこしたらしい。ところが、間もなく例の地下鉄サリン事件が起きて、しかも全国の家庭がテレビ・新聞で連日オウム漬けになった後で、「あのときに仰った話……そうだったんですネ」と、声をかけてくれた方もいたわけである。

〔腎患友の会で〕

　この夏、今度は、岩手県内の腎臓患者友の会から講演の依頼があった。いずれ、臓器移植の問題を避けるのでなく、正面に据えて話さなければいけないが、身体とこころ（脳の働き）とを別々に分けて考えるのでなく、〈いのち〉という視座から話をさせてもらった。

　腎患者のみなさんにお聞きすると、必ずしも他人の肝臓をもらって移植したいと切望しているわけではないようである。このまま透析しながらでも、人生をやっていける、腎臓移植を求めるかどうか、それはケースバイケースで、これからの状況と個人の意思選択の範囲として保留にしているといった様子である。それは、移植手術に免疫拒否の不安があるからでもあろうし、平等に臓器が得られるものでないことを知っているからでもある。

　また、腎臓移植の現実と脳死の問題とを切り離して議論してほしいという声もあった。しかし、いずれにしても、提供される臓器は、それを待っている患者数に対して絶対

的な格差で乏しいわけで、自分が助かりたいと頑張れば、言葉はきついが、エゴということにもなりかねない。

現実の、必要性からして、脳死の問題と臓器移植は根は一つであって、脳死を死とすることを否定あるいは疑問としたまま臓器移植を肯定しようとする論は、矛盾を孕んでいて、梅原猛氏のようにそこだけ「菩薩行」をもってきても、埋め合わせは無理だという指摘のあることも、話した。

臓器が欲しくて、心のなかで何度殺したことか、というアメリカの婦人の告白も新聞で知った。どう考えたらいいだろうか。

それから、話を「こころ」の方に運んだ。自分の健康管理を上手くコントロールできさえすれば、その日を十分に生きる、生き切る、生き甲斐を感じられるのではないか。それぞれの人生、歩く速さは自分で決めるものであって、辛い、どうして私が、と嘆きながら生きるよりも、悩みを突き抜けてほしい。私の先生は、こう仰った。それぞれに受けとめ方があるだろう。それでいいではないか。つまり〈私の仏教〉をもっていただきたいんです――と。宗教と構えないで、風のごとく漂うあいまいさの中にでもいい。

〔『本』を掌に〕

科学知識による自己コントロールを信条にしておられた柳田邦男氏は、近著『犠牲――わが息子・脳死の十一日』で、「死」を大事にしない医療は荒廃する。死を大事にするとは、死にゆく時間を大事にすることであると書いている。そして杏林大学の竹内一夫氏の「脳死は個体の死の前段階（プロセス）の一つ」という見識を紹介して、脳死の段階でその患者が死んだことにするかどうかは、死の定義の問題であって、科学的な事実ではない、と論じている。

家族は精神的ないのちを〈共有〉しているのであるから家族の感情を「癒す」時間が許容されなければならない。脳死をひとの死と認めたら、日本の医療現場の現状では、失うものも大きいことを具体的に指摘している。

医学解剖学の養老孟司氏は、『カミとヒトの解剖学』のなかで、死ぬこととは、実は生き方にほかならない。すべての人は、異なった人生を歩む。したがって、すべての死は異なっていると――。これは本当なら仏教者のだれかがいうべき言であろう。医学の側には、〈いのち〉〈生死〉に

ついてそこまで思考している方々がいる、ということだ。

その上で、「ご臨終です」というのは「もう生き返りません」といっているだけで、「死ぬ」という瞬間はない。人間はそれほど人体のことについて「知っている」わけではない、と書いているのである。

さらに、〈献体〉もどう考えたらいいものであろうか？尊い善行・菩薩行と、隣人愛とだけうけとめていいのか。もし、菩薩行であれば、仏教者はすすんで献体の登録をすべきだ、ということになる。だが、人間の身体（死体）を物質、資材・部品とみる感覚とは違う、浄化されることを願う日本人の身体観、この認識が大切ではないか。一体、身体があって、眼や耳・鼻・舌・肌からの、五感が脳に伝わって、脳のはたらき（知能や情操）が可能になる。身体から分離して脳の作用などないわけで、古くは「心身」ではなく「身心」と書いたのも、身体を重視したからである。

以前、医療にかかわっている方から電話で相談を受けたことがある。大学に入って間もない娘さんが、自分の体を献体登録したいと言い出した。どうしたらいいか、というのである。娘さんなりに考えた結果と思うけれども、まだもっと別な考え方や感情を体験してからでも遅くはないのではないか。「自分の体だ」というけれども、もしもお母さんが亡くなったとき、あなたはお母さんの意思がそうだとしても、躊躇なくホルマリンのプールに漬けておけますか？　お母さんも、あなたの献体を「善いこと」だけでは受入れられないと思う、そのように伝えてほしいと応えた。解剖にたずさわる医者は、自らの身体も死後提供するとは言わないらしい。臓器移植推進を主張する医師で、自身もドナー登録している人は少ない、という。

現状では「脳死」を人の死とする社会的合意など未完というべきである。もっともっと、時間がかかっても、時間をかけて、広範に議論を積みあげ、認識を深めていくしかない。医師や患者さんだけでなく、ことにも宗教にかかわる方々は、宗団としての統一見解を待つなどというのでは、この問題は駄目なのだということを自覚される必要がある。

最近読んだものに、現代は、もはや僧侶に何も期待など

していない、といった論調のものが二・三あった。そう言われている一人として、弁明はしたくない。宗門の人は、ズバリ本当のこと、耳に痛いことを言われたりすると、聞こえない風を装う傾向がないでもない。寺院（宗教法人）の住職として、死者と生者との関係（供養）に携わっている身として、〈いのち〉の本質なり〈看取り〉について書かれた『本』を読むくらいの意識、『本』を掌にしてではなく事に触れて深く考えさせられるだけの下地が、あるのかどうかを問われていることだけは、事実である。

〔被災地の月〕

去る九月九日の「読売」一面に、カラー写真つきで、

「阪神大震災からの復旧が進む被災地神戸を八日夜、待宵の月が照らし、技術大国の象徴だった高速道路の寸断された姿を淡い光の下に浮かび上がらせた。……長田区東尻池町では、三十～五十㍍の橋げたが取り外され、例年なら見えない月が雲の間に（写真）。深まる秋のなか、被災地に名月を楽しむゆとりはなく…」とあった。

この夜、私もたまたま神戸長田の新開地でこの月を見た。ただし私には、ビルや高速道路のことは、関心外であった。

一月、テレビや新聞で被害の状況が報道されると、間もなく全国的に義援金だ、ボランティアだとなった。義援金集めにわが宗も挙げて努めたし、だれもが傷みを共感し、善意をもって阪神の復旧の一日も早からんことを願った。春の彼岸会に、東北の中尊寺でも、震災で亡くなられた方五四〇〇人の名前を記帳して、慰霊法要を厳修した。

ただ、死亡者の遺体の処置はどうしたのであろうかとか、辛うじて生き残った被災者も、家族は亡くし、ローンは残

り、これから先なにを生き甲斐に残りの人生を生きていくのだろうかなどと、だれもが思ったことであろう。瓦礫と化した家の跡始末など、頑張っているうちはいいだろう。心身ともに疲労がたまってきたとき、こころの均衡を保つことができるだろうか。今年の夏は異常な暑さであった。これからが辛い道のりだとすると、心のケアーが必要になるだろう。言ってみれば、義援金とかボランティアは、だれでもといえば語弊があるが、できるわけである。

たしかに、わが宗門でも「被災地救援」を看板にかかげてイベントを催したりしているが、それで何千人集まったとか、レーザー光線がどうのなどといった次元の話を聞くとどうも、なにか違うナ、という気がしてならなかった。

暑い陽射しの下で、その辺から見つけてきたような汚れた硬い椅子に腰をおろして、独り老人がいた。何かを視ているのでない。見るものも、思い出すものも、その気力さえも何もかも失った、復興などに関係ないとしか言いようのない姿である。その老人の家が在ったらしい跡に佇って拝むしかない。瓦礫がまだ片づいていない所もある。食料や衣服と一緒に家族の骨壺と生活している人もいるのでは。

疲れ来て　すがる晩夏の　佛かな　　楸邨

一昨年亡くなった加藤楸邨先生の句が、現実のただなかに立たされて、しみじみと想いだされる。

この街の寺院は総じて小規模なようだ。「急に大きくなった街ですから、住民とお寺とのおつきあいの仕組みができてないんです」と、中年の人が話してくれた。比較的に広い敷地をもった寺があったが、門を入ると正面に、早速「本堂再興浄財喜捨御芳名」札を架けるための立派な木枠が用意されていた。どういう神経か、とたまらなくなる。これではとても被災者の心のケアーなど望むべくもない。

空き地と化した宅地の跡をまわって拝んで歩いた。

何のためにと言われても、その問いにどれだけの意味があるのだろうか。二日滞在して、街のどこにも笑顔がなかった。癒されていない被災地神戸の現在の症状である。

いま被災地の人たちに「善意」のデモンストレーションは要らない。心身の問題を、医療だけに任せていていいのであろうか。宗教法人を宗教法人たらしめるのは、手続きでも書類でも、壮麗な本堂でもなくて、ひとなのである。

（円乗院住職）

「塔婆について」

佐々木 秀円

　僧職となれば塔婆を書くのは必修である。その塔婆の意味を御檀家の方々にも知っていただきたいと思う。

　塔婆には、角塔婆、四尺又は六尺の細長い板塔婆があり、墨書の「梵字」が標示されている。なにか有難く感じさせる。その梵字は何を表しているのであろうか。プロ野球の各球団の帽子は色とりどりであり、それを見れば、ユニホームの色や形、そして球団を思い浮かべることができる。つまり塔婆の梵字は、野球帽の色であり、イニシャルに相当する。

　本来、塔婆は釈尊の遺骨を納めた建造物（舎利塔）に始まる。以後、釈尊を崇拝する人々はこの塔婆を釈尊として尊崇礼拝してきた。

　こうした塔婆（塔寺・仏塔）のもとに参集する人々の間から、舎利（遺骨）の崇拝だけでなく、釈尊の教えを本位に、経典を尊重し供養宣布する大乗教団（利他主義の立場で人間の救済に関する教義を説く）が興った。中国や日本の仏教寺院でもこういう流れに沿って、三重塔や五重塔のような日本様式の塔が建立されてきた。

　釈尊に由来する建造物としての塔と趣を異にした、「五輪塔」がある。この宇宙（五輪・五大）は「地・水・火・風・空」の五要素で構成されている。この五輪は種子（塔婆の梵字）の色・形をともなう。梵字を見れば、形や要素を思いおこし、その意味を心中に想定できるのである。野球帽のイニシャルと同じ理屈である。

　この五輪塔は、本来は大日如来を形で顕わしたものであり、宇宙を構成する五元素とともに身体の五処にこれを対応させる。五輪は下から地・水・火・風・空と上がる。その形は下から正方形、円形、三角形、半月形、宝珠形となっている。五輪塔は平安時代頃から一般化し、供養塔として又、墓石として用いられ、板塔婆は物故者の追善供養の為に立てられた。この他に五輪を刻んだ四角塔婆（中尊寺大施餓鬼会にも建てられる）、六角塔婆などもある。

　私達がお墓で目にする板塔婆は、この五輪塔に由来しているのである。したがって板塔婆の上部には、上から宝珠・

半月・三角・円・正方形の形が刻まれている。そして各々、𑖏（空）、𑖎（風）、𑖨（火）、𑖪（水）、𑖀（地）という梵字が書かれている。この下に年回忌本尊の梵字𑖮𑖿𑖨𑖱𑖾（キリク）とか𑖭（サ）とかの十三仏の中の種字を書き、次に戒名が書かれる。

　裏面はヴァンがやゝ長めに書かれ、その下にヴラ・ドヴァン・オン・ボッ・ケンと読む梵字が書かれる。

　各梵字の意味するところは「自分は（万物は）本来不生であることを覚り（ア）、言語表現を超越し（ヴァ）、過失を解脱した（ラ）。原因と条件とに束縛されず（カ）、般若・空の智慧は虚空に等しいと知った（キャ）。」ということである。

　まず塔婆の表面𑖀字は、サンスクリット語の不生という語の最初の字で「阿字諸法本不生」のことであり、この宇宙は大日如来そのものであるから、その存在感は万物はもともと存在していて新しく生じたものでなく不生不滅であり、それは堅固不動であるから大地に例えられ、地大を示す。形としては四方が均等であり、安定し不動である正方形で表され、色は黄色。𑖪字はサンスクリット語の水に由来する。「自性離言説」のことで、それは日常の言語では表現できず、分別思慮を越えている。分別の垢を洗浄し、熱悩を除いて清涼にする水にたとえられ、水大を示す。形としては思いのままに、転回し自在である円形で表され色は白色。𑖨字はサンスクリット語の塵に由来すると言われているが、太陽とする考えもある。「清浄無垢塵」のことで、それは清浄であり、塵や垢が無く煩悩という塵を焼き、燃え盛る火に例えられ、火大を示す。形は鋭利な形で火炎を表す三角形で色は赤。𑖎字は、サンスクリット語の原因に由来する。「因業不可得」のことで、それは原因や条件や造作などを離れている。自在に活動し、塵など吹き払う風に例えられ、風大を示す。一辺は正方形の安定性、一辺は円形の自在性という両者の特性をそなえた半月形で表され、色は黒。𑖏字は、サンスクリット語の空に由来する。「等虚空」のことで虚空のように無碍自在である。碍げない大空にたとえられ、空大を示す。団子形は三角形と半月形を合せた形であり、色は青色。

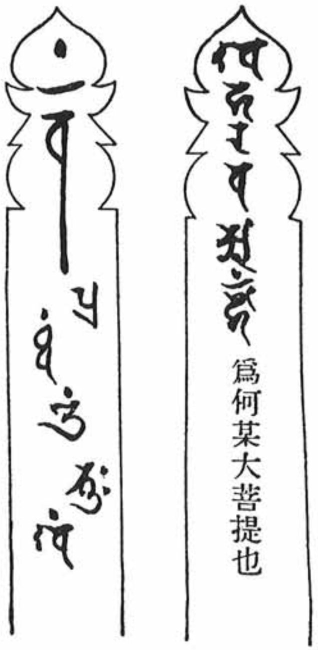
　以上、五つの梵字とその下に書かれる戒名は大日如来そのものの中に物故者が包みこまれていると言えるであろう。

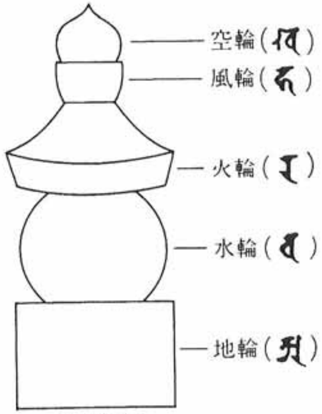
この五字を受持すれば、得る功得は量（はか）り知れず、災障・病苦は無く、重罪も消滅し、無量の徳がそなわり長寿を得るといわれる。

次に塔婆の裏の梵字はヴァン・ヴラ・ドヴァン・オン・ボッ・ケンと読み、大日如来と亡者とが不二一体であり、地獄などの悪趣を滅して浄土にあることを表している。

以上、塔婆についてかい摘まんで説明させていただいた。

（地蔵院住職）





五輪塔

関山植物誌〈2〉

清水 秀澄

（一老 観音院住職）

ウワミズザクラ

昭和三十二年八月、西磐井科学同好会に依る第一回中尊寺植物研究会が行われ、四十九年八月、過去五回の研究を基に『関山中尊寺一山植物目録』を作成して、十七年間の研究のまとめとした。この調査の中で会員達に依ってウワミズザクラと、次いでこれに最も近い仲間のイヌザクラが夫々一本ずつ発見されたが、イヌザクラの方はその後二・三年で枯死した。

何故私がこうもウワミズザクラに拘るかというと、昭和二十五年藤原四代公の御遺体調査の砌り、御棺の中から他の植物の種子に混入してウワミズザクラの種子が出て、調査団の大賀一郎博士から「現在此の山にウワミズザクラがあるか」とのお尋ねを受けて当惑し、その後頭から離れなかったからである。光堂に御遺体がおさめられて後、今日に至るまで、この間、金色堂に程近い周辺にこのウワミズザクラが生育していたものと思われる。写真の花は、ウワミズザクラである。日本名はウワミゾザクラ（上溝桜）から転訛したものと聞く。昔、亀甲で占いをするとき、この材の小口に溝を彫ったので上溝（うわみぞ）と云ったとか。

現在、この木は山内地蔵院の境内にある。

平泉・文学散歩〈1〉
西行歌碑

東稲山の桜

土岐　善麿
（歌人・国文学者）

　奥州平泉といえば、れいの芭蕉が奥の細道の途中、「夏草やつはものどもが夢のあと」に立って、「国破れて山河あり、城春にして草木深し」の杜甫の春望を想い起しながら、詠嘆これを久しゅうしたところである。「五月雨の降りのこしてや光堂」もあり、この藤原三代栄華の遺跡は、先年、清衡、基衡、秀衡の遺体のくわしい科学的調査報告がおこなわれ、更に毛越寺、無量光院などの発掘作業が進むにつれて、奈良およびその周辺の古跡巡礼とはまた格別な、一遊の興味に誘われるのである。

　一遊どころではない。わたくしのように従来あまり旅行をしたことのないものも、平泉へは近年数回ゆく機会があり、特に中尊寺からの委嘱によって「秀衡」という新作能をまとめることになった前後から、因縁はいっそう深くなり、昨年の秋も、仙台に国語教育研究会議が文部省の主催で開かれたとき、講演のついでに一ノ関まで招かれ、ちょうど発掘作業を指導されつつあった藤島亥治郎博士の案内をうけて、短い時間に、能率的な実地踏査を遂げさせてもらったわけである。新作「秀衡」は、中尊寺の境内にある古雅な野天の能楽堂で、ほとんど毎年、あるいは一年に数回も、上演されるという。最初の発表公演に参列する機会を逸したため、そこではまだ一度も、わたくしは作者として鑑賞していないが、この一曲、あの地方ではなかなか評判で、一種の年中行事にもなっているらしい。

　中尊寺の大執事格である佐々木実高さんが、喜多流に年期を入れている「快僧」であるため、結局「秀衡」もできたようなわけであるが、更に、さきごろ、実高さんは、その「快僧」振りをいよいよ発揮して、わたくしに「大きな字」をかけというのである。これにはまったく閉口せざるをえない。平にゆるしてもらいたい、といっているにもかかわらず、その「大きな字」をかくべき大きな紙を、遮二無二、わたくしの小さな応接間へ置いて行ってしまった。「大きな字」というのは、西行の歌の碑をあの北上川の一部の桜川のほとりに建てる計画で、数年来、その石を探していたところ、やっと、

すばらしいのが河底から得られたので、それに刻む一首を書けというのである。いかにも大きな自然石で、――高さ二メートル余、幅一メートル半もあろうか――その原形を大きな紙に写しとり、これへ一気に書きなぐれということらしい。新作能の詞章ならばいくどもいくども書き直せるし、それを根気よくつづけなければ、喜多実氏が舞台の上で演じるところまでいかない。そのあいだがまた楽しみでもあるのだが、碑のほうは、いったんノミで刻んでしまったが最後、まず朽ちることもなく、すぐ地に埋めてしまうわけにもいかない。ところで、その刻もうという西行の歌は、

　ききもせず　たばしねやまの
　さくらばな　よしののほかに
　かかるべしとは

　この一首、これはたしかに山家集雑の部にあって、

　みちのくにに、平泉にむかひて東稲山と申す山の侍るに、こと木はすくなきやうに桜のかぎり見えて、花のさきたりけるを見てよめる

と詞書きもそえてあり、ちょうど今から七百七十年前の、文治二年の冬十月十二日に平泉に到着して――そのときは陽暦十一月で雪が降っていた――その翌春のこととすれば、西行はまさに七十歳の老法師であった。そして山伏すがたの判官義経が武蔵坊弁慶らにまもられながら、やっと秀衡のところへたどりついたばかりのときということになる。平泉で義経と西行とは対面したかどうか。歴史としては、そのへんのこともおもしろいが、それはとにかく、「大きな字」を書くことは、わたくしにとって、安宅の関を越える……それほどではなくても、よほどの勇気――あるいは蛮気、ないし茶気を要する。

　かつて大正十一年、啄木の記念碑を渋民村に建てるとき、あの「やはらかに柳青める北上の岸辺眼にみゆ泣けとごとくに」の歌をわたくしにかけということであったが、固く辞退して活字体に刻んだのであるし、昨年造られた浅草等光寺境内の記念碑も、同様に活字体を用いてもらったのは、特定のものの個性のある書体を――啄木

自身の筆跡が残っていればべつであるが——避けたいという理由もあったからである。中世、歌ばかりでなく、書でも知られた西行の一首をわたくしの悪筆で刻むことは、そのときの老法師と今のわたくしとがおよそ同年であるという以外、気軽に笑ってひきうける理由はマア考えられない。「願くは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月のころ」、さすがに西行は一生の覚悟もきまっていたらしいが、わたくしにはこのさいまだ、あの大きな紙をひろげて、墨をすりはじめる分別がつかないでいるのである。しかし、みちのくの雪が解けて、すこし遅れる春の東稲山の桜が、ほころびかける時分になったら、あの快僧が、また奮然と山を下って来るかもしれない。そして喜多同門のよしみをもって、こんどはおもむろに「呼びかけ」るかもしれない。「花みれば涙しとどに、鳥きけばこころおどろく」季節である。

（昭和五十六年四月）

（土岐善麿著「斜面方丈記」春秋社刊——より抜粋）

西行歌碑

新作能「秀衡」 中尊寺能楽堂 昭和27年春

今 春聴大僧正の晋山

菅原 光中
（執事長）

昭和四十年十二月二十七日付、中尊寺住職（金色院兼務）に今春聴（東光）師が任命された。

貝塚市の水間寺、八尾の天台院、春日井市の密蔵院、愛知の明眼院からの転住である。

中尊寺は昭和三十八年七月一日薗　実圓貫首が遷化された後、真珠院菅野澄教一老を住職代務者として国宝金色堂復元修理を行っている最中であり、世紀の大修理を事なく完遂させたいという一山悲願を以っての招聘であったと思います。

仮入山の日を春彼岸の中日と定めて、住職就任の諸手続きや準備万端を整え、いよいよ前日、花巻空港に午後の便で到着されることになりました。お出迎えの一行が空港で待つうちに、昼頃から降り出した粉雪がいつの間にかボタン雪となり、滑走路は見る〳〵雪原となってしまったのです。

やがて上空を旋回するプロペラエンジンの音が二度三度した後、機影も見せずに北に向って飛び去りました。降雪のため着陸不能とのアナウンスがあり、レーダー施設のある三沢基地へ着陸し、塔乗者は折り返しバス輸送するとのことである。出迎え者は、お宿の花巻温泉に控えて約五時間程経た九時近く、「ご到着」との声で玄関よりお部屋に案内して、ほっとしたことは忘れられません。

今貫首は仮入山について次のように記述されてます。

「翌四十一年三月二十一日の彼岸の中日、仮入山のため陸奥に

赴くと、近年稀なる大雪にめぐり会うた。積雪実に一尺五寸あまり、紛々と降りしきる雪の中を関山の月見坂を登った。門前にならぶ一山の僧衆は、これ疑いもなく東北の健児諸師、僕は彼等と共に中尊寺に骨を埋める覚悟をしたのである。かつて昭和二十五年、三代の御遺体を金色堂から運んだ夜も近年稀なる大雪だった由で、わが山においては斯る異変を吉兆となすと聴いて僕は聊か安堵を覚えた。」

晋山式は春の藤原祭りの初日、五月一日に執り行われた。

晴天に恵まれた境内は多くの善男善女で埋まり、本堂内の一山衆僧、来臨随喜の見つめる中、宝前に低い聲で表白が読み上げられた。

慈覚大師開山以来の法灯護持、藤原氏の仏国土建立の精神、偉業を讃える文が続き、

「然るに不肖東光坊、一宗の与望を荷ひて晋山する所以のものは、絶遠の地に安逸するに非ず、作務をもって栄となし、聊か仏恩に報ぜんがためなり。

胸を六郡に開き、奥羽に跨り、天台教学の法鼓を鳴らし、曠大沈静の量あらば乃ち期運に応じて先聖の遺法を継ぐを得べき乎。

啓白辞浅しと雖も志願旨深し。三宝證知し給へ。

昭和丙午（四十一年）五月一日

権大僧正大阿闍梨東光坊春聴

つたない願文を読みながら僕は自ら涙を禁ずることが出来なかった。初代清衡が自ら東夷の遠酋を以て任ぜられるなら、僕は東夷の沙門として生きなければならないと思う。新貫主として僕の出来ることは、わずかに口舌を弄し、聊か文章を草するしかない。しかしながら一管の筆は堕夫を立たしめ、三寸の舌も人の魂を刺すことは可能だ。僕は自ら、つとめよや、つとめよや、と言い聴かせているのである。」

退堂する新貫首の足どりに、随喜会衆の華やかさとは対照に、ずしりと重さを感じて既に三十年が過ぎました。

天台会（霜月会）

破石 澄元

（金剛院住職）

十一月二十四日、中尊寺本堂の外陣には、貫首を正面に一山住職後住が左右に向き合って居座る。下座の者が世話方の準備した串刺しにした煮染め（にしめ）を、上座より順次皆に配り、一同にそれを食べる。天台会法要の前に行われる、古来からの儀式である。

天台会の前日（二十三日）、結衆と呼ばれる小僧たちが中尊寺本坊に集まり、法会の準備をする。供え物の準備は、支院持ち回りになっている世話方が行い、結衆は主に道場荘厳（しょうごん）の任にあたる。道場、仏器などをきれいに整え、吹花と言われる椿、さくら、つつじの三種類の造花を色紙で作る。次に細く割った五十cmくらいの竹に五色の紙を巻き付け、さらに上部十cmくらいで折り曲げ、その先端より五色の幣を垂れ下げる。これを紙垂（シデ）というが、三本作る。この日は造花だけを本尊前の華瓶に飾る。結衆の最上席を役席というが、この役席が導師となって結衆により御逮夜の法要が営まれる。

翌二十四日早朝、世話方より煮染めや、飯、野菜などの供え物の材料が結衆に手渡される。お供えするものは、三宝の上に飯椀、煮物椀、さらに高坏（たかつき）に立てて供える大根、にんじん、白菜などの野菜三種類。合計五つの椀・高坏が三宝に並ぶがこれをお立て盛りと言う。さらに大皿に焼き餅（げんべだ）を置き、中央に紙垂を突き立て、周りには栗、カヤの実、くるみ、干し柿、昆布などを供える。お立て盛り、げんべだをそれぞれ三組を準備し宝前に供える。

結衆のうち下座から四人を下四（しも）人というが、この下四人は現在宝

物館「讃衡蔵」に収蔵されている天台大師の御影（みえい）を遷座する。先頭にたつものが引金（いんきん）を鳴らし、二人が長櫃に入った御影を前後に担ぎ後方に一人が従う。本堂正面から道場に入り、御影を安置する。

道場の準備が整うと、貫首をはじめ一山住職・後住が本堂外陣に居並び、冒頭の煮染め（おでん）を食べてから道場に入り法要が営まれる。

天台宗寺院のなかで、重要な祖師忌として常楽会、伝教会、慈覚会、天台会がある。霜月会ともいわれる天台会が中尊寺においては特別な意味を持ち、取り立てて重要な法会になっている。

「関山中尊寺蔵中行事」（天保三年・仙岳院文書）に

嫡子従二七歳児一御一馬勤レ之、十四歳得度、以二七ヶ年臈一房号免レ之、従二得度一二十一ヶ年之内、是ヲ詰衆ト云、二十二ヶ年ヨリ七ヶ年之内是ヲ中老ト云、夫ヨリ以上ヲ老僧ト申候事云々、

中尊寺に於いて、山内支院の後継者は十四歳で得度受戒をし、それより二十一ヵ年は結衆として小僧勤めに励み、その間に種々の経歴を積み、最後は役席の任を全うし中老、老僧と進んでいくことになる。そして、年臈はこの天台会初出仕をもって数え始められる。一山の住職・後住はこの年臈をもって座次が定められ、且つ重要な年中行事における諸役が決まるものであり、崩すことの出来ない重要な掟として今日に受け継がれている。

天台会の会場で、その年に初出仕の者があればその場で役席より紹介があり、また二十一ヵ年の結集を終える役席があれば、その場で挨拶をし、一山の祝福を受ける。

本年も後住の一人が漸く役席を上がって一人前の僧となる。

境内菜園

千葉 快恩

（円教院住職）

＊インタビュー

「なにせ、師匠がそうでしたから」

朝早くから畑に出る。一年三百日（あとの六十五日は雪掃きで）。毎日、よく畑にそれだけ仕事があるものですね、と尋ねたら、そういう話しなのである。

師匠というのは、山内のやはり支院・大徳院の前住職のことで、厳密には、得度が終戦の翌年で、円教院の坊跡に来て開墾をはじめたのは、その前の年からだった。

「馬曳いて、沢を渡って御山の畑耕しにきていたわけでした。師匠も自坊で鍬持って畑に出てらした」

「仏様にお供えする御野菜ぐらい自分で作る、誰でも当時はそうでした。自分達が食べるものは無論自給自足でしたから。小麦も作りました。みな真似して覚えた……」

＊『作業日誌』

「八月二十四日は恒例のお施餓鬼ですから、胡瓜や茄子、トマト、瓜、西瓜、トウモロコシなどを本坊にお供えします。茄子は、五年畑を換えなければ。三年では駄目。麓の谷起（やぎ・河川荒地）の方にも人参やゴボウ、長薯（いも）などの根菜類を作ってます」「なにせ……野菜作りは土を作ることで、落葉を掻き集めて堆肥づくり、それを三月末に畑に入れる。この時期、何をどうすればということは、みな『日誌』を見て」。

手もとに、十五年几帳面に付けてこられた作業日誌があった。

土の大こなしは奥さんが専門という話だが、こと農事に関しては住職に協力以上のアドバイスもできる、頼もしい寺庭婦人とみた。

本坊から、六時の鐘が微かに響いてくる。住職は「なにせ…」が口癖。「鳥の声が少なくなりましたが、代わりに孫の声が…」

みちのくの僧坊の朝である。

風信 / 語録

大和田健太郎

（朝日新聞編集委員）

土木と文化遺産
芭蕉の涙も枯らす車道

土木行政は、どれだけ歴史的な景観を大切にできるのだろうか。岩手県平泉町で、北上川の流れを延長四キロにわたって最大百メートルも移動させる壮大なプランが練られている。

川の右岸の堤防計画が、奥州藤原氏の政庁とされる平泉館（柳之御所）跡にかかっていたための変更だ。跡地は五月、国の文化財保護審議会が史跡指定を答申した。今年は、藤原清衡が平泉を開いて九百年ともいわれる。

このプランが実現すると、対岸の水田の向こうの牛が寝ているような形で親しまれてきた束稲山の眺望が、堤防で損なわれてしまう。国道バイパスとなる堤防上は、車が疾走することになる。

これでは、漂泊の歌人西行が「聞きもせず束稲山の桜花吉野のほかにかかるべしとは」と詠んだ風景は台なしになり、「兵どもが夢の跡」とむせんだ芭蕉の涙も枯れてしまう。歴史散策を楽しむには、うっとうしい光景になりそうだ。

いにしえの中尊寺の町並みを伝える曼陀羅が残っている。点在する寺社堂塔と、裾をからげて舟を下りる善男善女の参拝姿が描かれている。山と川と町は一体感をもっていたのだ。

道路は、国内の各地で歴史的風土を破壊してきた。高速道路がまたぐ東京・日本橋の住民は「日本橋が鉄のたすき掛けになって、街に活気がなくなった」とこぼし、道路行政の専門家は「全国の道路元標が高架の下とは」と嘆いている。その寿命が尽きる来世紀中ごろに向け、東京都庁の内部委員会は、橋上に青空を取り戻す代案をまとめている。

それだけに、平泉の行方は、河川と道路行政の実験台としても注目したい。せっかくの計画変更だが、このままでは、土木の華麗なる変身とはいえない。

（「朝日」八月三十日〈ミニ時評〉）

風信 / 語録

武前 武八

（江東区平野一）

平泉九百年祭のご盛会おめでとうございます。

昨日はまた、岩手日報などお送りいただき恐縮にたえません。有難とう存じます。

記念すべきお神輿渡御に参加させていただき、力を合わせ月見坂を登り切った時の、感激と感謝は言葉に言い表わせない感動でございました。

町の方々の御協力と関係各位の皆さま、特に佐々木様の御努力に心より御礼申し上げます。これは参加者全員の気持ちでもあります。

明年八月の富岡八幡例祭の折りお目にかかれるのを心待ちにしております。

合掌

九月八日

〔陸奥教区宗務所報〕

第二部　中尊寺関係　〔人事・遂業〕

□ 教師補任

大僧正　中尊寺　住職　千田　孝信
僧　正　常住院　住職　佐々木高円
僧　正　瑠璃光院住職　菅野　最純
権僧正　願成就院住職　三浦　高信
権大僧都　薬樹王院住職　北嶺　澄仁
中律師　長楽寺　住職　佐々木慎有
（四月二十一日付）
少僧都　自性院　住職　北嶺　澄照
（七月十九日付）

□ 法華大会遂業者

長楽寺　住職　佐々木慎有
大長寿院法嗣　菅原　光聴
法泉院　法嗣　三浦　章興
（十月一日～六日）

□ 宗務所長選挙

大長寿院住職　権僧正　菅原　光中
（十月一日　決定）

執務日誌抄

平成六年十月～七年九月

平成六年

◇十月

一日 月次大般若会（本堂）
寺報中尊寺「関山」創刊号刊行、一山並びに関係各位配布。
二日 大相撲佐渡嶽部屋土俵抜き（松戸市、総務春興出張）
慈眼会（本堂）
月例法話の会（講師 大長寿院光中）
三日 菊まつり協賛会役員会
五日 全国寺庭婦人会連合会役員総会（花巻温泉にて、貫首講話）
翌日一行来山。
六日 書写山円教寺住職大樹孝啓師来山。
全文連事務局長後藤佐稚夫氏来山。
八日 新座主伝燈相承式。（延暦寺根本中堂 貫首出席）
九日 山内真珠院先住澄覚師七回忌法要。
十二日 毎日新聞盛岡支局長服部氏来山。
十六日 南総長光寺・光明寺様檀参来山。
十九日 山内白虎堂例祭
二十日 菊まつり開幕法要（本堂十一月十五日まで）
二十一日 スウェーデン公使来山（執事長光中案内）。
二十二日 月例報告会
二十三日 故千葉了道氏供養合唱奉納、同氏作詞「中尊寺」ほか四曲（本堂にて）。
二十四日 盛岡にて「慈覚大師入唐求法絵図展」開催、執事長出向。
二十五日 文化庁工芸課松島主任調査官、文化財保護審議会久野専門委員ほか、経蔵諸尊像調査のため来山。
ポーランド大使来山。
二十六日 元衆議院議員故志賀健次郎氏告別式（貫首列席）
二十七日 天台保育連盟研修会、貫首講話（気仙沼 観音寺）
二十八日 秀衡公御月忌 金剛界曼荼羅供 常の如し。
三十一日 平泉町戦没者追悼式、貫首導師

◇十一月

一日 秋の藤原まつり開幕
藤原四大公追善法要（本堂、稚児行列、金色堂練行）
境内紅葉と堂影ライトアップ（七日まで）
二日 菊供養会（本堂）貫首法話
三日 能「枕慈童」（邦世）狂言「盆山」（慎有）日光市文化協会一行観能。
菊まつり写真コンテスト撮影会（一〇〇名参加）
五日 平泉中学校三年生座禅会（本堂）
七日 文化庁美術工芸課湯山主任調査官ほか来山。中尊寺古文書一括指定のため調査。
九日 福聚教会東日本研修会（花巻温泉）。
十五日 仙台「法隆寺展」一山・職員多数出向（仙台市博）
十九日 宗内一斉托鉢、一山佛青会員ほか参加（仙台市内）
二十日 福島教区観音寺様檀参来山。
教区研修会、（仙台仙岳院にて 講師真珠院澄順）。
二十二日 貫首、江刺市商工会議所研修会にて講話。
二十三日 天台会御逮夜、結衆は終日法要準備。
二十四日 天台会（本堂）
二十九日 執事長・管財担当澄元両名文化庁出向
三十日 箟峯寺一山松本坊様檀参。

◇十二月

一日 月次大般若会
月例報告会
七日 薬師会（讃衡蔵）
奈良県立橿原考古学研究所長来山。
九日 山内年末風景、マスコミ一斉取材。
十一日 陸奥教区会（一関市）
「平泉祭」鎌倉市の協賛について折衝（円乗院邦世出向）。
十四日 弥陀会（本堂）
十五日 河北新報社、新年特集記事にて貫首に取材。
前貫首御法嗣多田孝文師、墓参のため来山。
釈尊院成寛、ベトナム佛教美術調査団にて渡越。
十六日 暮れには珍しい大雪。
臨時一山会議
十七日 白山会（本堂）
十八日 月例 法話の会（講師 円乗院邦世）
二十日 境内諸堂諸佛像煤払い（マスコミ各社取材）
二十一日 悉曇伝修会（講師 山形性相院後藤仁田師）
二十四日 文殊会（経蔵）
二十五日 柳之御所遺跡保存懇話会総会（執事長ほか出席）。
結衆、正月諸準備開始。
二十六日 読売新聞社主催「新日本街路樹百景」に月見坂杉並木が入選。読売本社にて表彰式（執事長出席）。
二十八日 恒例御供餅つき、地元子供

会、出入方多数参加。

二十九日　昨夜の八戸沖地震にて本堂の壁、ガラス破損被害あり。

三十一日　午後三時、総礼。

平成七年

◇一月

一　日　晨朝、新年祈祷護摩供修行（本堂、開山堂、赤堂にて常の如し）
八時半、東山町「若水送り」一行一〇〇名来山、若水進上。
十時半、総礼
十一時、修正会　釈迦供（本堂）
二十時、冬堂籠もり（結衆開山堂）

二　日　九時半、正月祈祷護摩供
十時、修正会　薬師供（讃衡蔵）
十三時半、謡初め「東北　老松　高砂」（本坊広間）

三　日　九時半、正月祈祷護摩供
十時、修正会　山王供（山王堂）
十一時半、元三会　慈恵供（本堂）

四　日　十時、修正会　薬師供（薬師堂）
御用始めにて町関係者ほか年始挨拶に来寺。

五　日　十時、修正会　経蔵文殊供　大般若会（弁財天堂）
二時、梵焼供（結衆、開山堂）

六　日　十時、修正会　釈迦供・月山供（釈迦堂）
執事長、町新年交賀会出席。
結衆本日より寒行に入る（町内托鉢）

七　日　十時、修正会　十一面供（本堂）
十一時半、大般若会（本堂）
十四時、修正会　弥陀供（金色堂）
春の神事能番組会議（本坊広間にて）

八　日　十時、修正会　薬師供・一字金輪佛御法楽（讃衡蔵）
十三時、恒例「金盃抜き」、中村前県知事ほか一八〇名列席。

十一日　中日新聞、新春特集「平泉」取材のため来山。

十三日　節分会講中総会

十四日　慈覚会　慈覚大師御影供（本堂）
月例　法話の会（貫首）

十七日　早朝、兵庫県神戸市方面にて大震災発生。被害甚大なる模様。後日報道にて、死者累計五千人を越す由。（阪神淡路大震災）

十八日　平成七年度　檀信徒総代会。佐々木誠総代長辞任により、千葉清氏が新総代長に選任。

二十日　當山前貫首「如帝珠院勧学大僧正厚隆大和尚」三回忌法要奉修。貫首導師、山内住職徒弟出仕。

二十一日　一老観音院秀澄ほか、前貫首三回忌法要出仕のため横浜大聖院に出向。
金色堂御遺体調査委員大槻虎男博士御逝去の訃報あり。

二十二日　阪神大震災災害救護募金托鉢修行（一関市内で結衆）

二十四日　大震災救援募金として当寺義援金二百万円をNHK盛岡放送局へ執事長届ける。

二十五日　文化財防火デーに備え、中尊寺特設消防隊自主訓練。

二十七日　新一関市長佐々木一郎氏、市長就任挨拶に来寺。

二十九日　第二回地震災害救援募金托鉢修行、毛越寺有志も参加。

三十日　月例報告会

◇二月

一　日　月次大般若会
阪神大震災死没者追悼法要厳修（本堂）。

二　日　恒例「大節分会」関取琴の若・琴別府関迎え、町内園児二〇〇名、歳男歳女百名。

三　日　一山節分会法要（本堂）
本日にて寒修行満行。

八　日　「平泉祭」鎌倉市鶴岡八幡の協力を要請（実行委員幹事邦世出向）。

十三日　前天台座主恵諦大僧正猊下一周忌しのぶ会（京都市・都ホテル、執事長主席）。

十四日　涅槃会御逮夜（本堂）

十五日　涅槃会（本堂）
月例　法話の会（講師　積善院仁秀）

十六日　寺庭婦人岩手支部講演会（大広間、貫首講話）

二十三日　中尊寺門前会研修旅行、貫首講話（鳴子町方面研修）
一山悉曇伝修会（本坊広間、講師　後藤仁田師）

二十七日　月例報告会

◇三月

一　日　月次大般若会

五　日　平成六年度事務監査会

十一日　陸奥教区佛教青年会総会（毛越寺にて）

十二日　茨城教区西福寺様檀参来山。
月例　法話の会（講師　薬樹王院澄仁）

十三日　金色堂内陣保存状態調査のため、東文研中里、東博加藤両氏来寺。

十六日　日光輪王寺御門主荻原貞興大僧正本葬儀（貫首、執事長参列）

十九日　定例一山会議（大広間）
基衡公御月忌（本堂　胎蔵界曼荼羅供　常の如し）

二十日　境内遺跡事前調査及び遺物整理に金丸義一氏一行来山。（二十四日まで）
二十一日　春彼岸会「法華三昧」阪神大震災犠牲者追善法要厳修（本堂）
二十二日　重文釈尊院五輪塔調査のため東文研青木氏来山。
二十四日　開山会護摩供（開山堂）
二十五日　山内薬樹王院後住澄照君婚儀

◇四月

一日　月次大般若会
月例　法話の会（講師　真珠院澄順）
一山事務局、職員辞令交付並びに事務引き継ぎ。
六日　境内案内ＦＭガイド開始
八日　佛生会（本堂）
山内地蔵院後住秀厚君婚儀
十三日　陸奥教区布教師会総会（毛越寺にて貫首講話）
十四日　恒例両山懇親会
十五日　菊まつり協賛会総会
十六日　花まつり（参加者五〇〇名）
「九百年祭」の挨拶に町関係者と鎌倉市表敬訪問（執事長光中、幹事邦世）
十八日　特別展鎌倉彫作品搬入（管財澄元出張、日通美術運搬車で）
二十二日　陸奥教区会（本坊広間にて）
二十三日　毛越寺常行堂落慶式（一老観音院出席）
浅草寺本龍院様檀参来山。
二十四日　一山協議会
二十五日　神事能申し合わせ（能楽堂）
二十六日　地元老人会境内清掃奉仕。
二十九日　第十六回西行祭短歌大会、追善法要（本堂）
（講師・静岡県立大学教授高嶋健一氏）
三十日　「蘇れ黄金／平泉祭」オープニングセレモニー開幕法要（本堂）の後、竹内鎌倉市長・白井鶴岡八幡宮宮司ほか金色堂参拝。「鎌倉彫と秀衡塗展」テープカット（資料館）
仙台フィルによる「法楽の調」と鎌倉市長講演会（毛越寺にて）
歓迎レセプション（毛越寺レストハウスにて）貫首ほか多数出席。

◇五月

一日　春の藤原まつり開幕
藤原四代公追善法要　稚児行列、金色堂法楽常の如し。
東大名誉教授藤島亥次郎先生九十六歳誕生日を祝う会、貫首ほか多数出席。
二日　開山護摩供養（開山堂）
三日　「源義経公東下り行列」、午後三時金色堂着
いわき太鼓（福島県いわき市）奉納（本堂回廊にて）

四日　式三番、神事能「竹生島」（高円）
五日　神事能「八島　弓流し」（邦世、間　狂言　奈須与一語　澄元）、狂言「舟ふな」（慎有）
九日　寺庭婦人会岩手支部総会（大広間にて）
十四日　月例　法話の会（講師　地蔵院秀厚）
十八日　貫首就任二周年、諸堂参拝。
十九日　文化財保護審議会、「柳之御所遺跡」国史跡指定を答申。
二十一日　報道関係取材応待（執事長）
身障者「ひまわり号を走らせる会」一行一〇〇名来山、資料館前にて記念行事。
二十七日　「一隅を照らす運動」東日本大会（前橋市）、貫首ほか出席。総代参加。
二十八日　「藤原三代ゆかり平泉サミット」（平泉郷土館にて）
三十日　貫首、三千院御懺法講出席
三十一日　鎌倉市ケーブルテレビ、「鎌倉彫と秀衡塗展」取材に来山。三橋氏同行。

◇六月

一日　月次大般若会
長野市南部仏教会一行来山。
平泉祭「御神輿渡御」について折衝（幹事の邦世上京）
二日　貫首、県労働基準協会一関支部研修会にて講演（一関文化会館）
三日　北總教区泉養寺様檀参来山。
四日　山家会（本堂）
叡山北嶺大阿闍梨酒井師、ローマ法王訪問のため渡欧。
（山内真珠院澄順随行の一員として渡欧。～一七日）。
八日　地唄舞人間国宝・武原はん様御一行来山、翌日平泉所々御案内（円乗院邦世応接）。
十一日　中尊寺杯ゲートボール大会
「セミナー東方」（平泉文化会議所主催、毛越寺本堂にて　貫首ほか七名出席）。
十二日　陸奥教区寺庭婦人会総会（毛越寺）
十四日　秋篠宮殿下お成り受け入れ方打合せのため、県秘書課、広報課、県警本部等関係者来寺（総務応対）。
十六日　平泉小学校六年生ふるさと学習（講話　薬樹王院澄照）
隣山毛越寺貫主藤里慈亮師、就任挨拶に来山。
十七日　中里永泉寺本尊聖観音立像還座法要に貫首出向。
二十日　自在坊蓮光忌
月例　法話の会（講師　大長寿院光中）
月例報告会
二十一日　文化財保護審議会会長（鈴木勲氏）、文化庁長官（遠山敦子氏）ほか視察のため来山

（茶室にて貫首挨拶、執事長案内）
二十二日　本堂裏門屋根瓦葺き改修着工。
二十七日　職員研修旅行一班出発（日光方面、～二十九日）
三十日　群馬県下仁田常住寺薗実中師御夫妻及び実丞師来山。

◇七月

一日　薗実圓前貫首三十三回忌法要奉修、臨席八十名。中尊寺御詠歌衆、薗貫首自作詠歌奉詠。
二日　貫首、隣山毛越寺新貫主を表敬訪問。
四日　職員研修旅行第二班出発（～六日）
十二日　郡市仏教会「ウェイサカ」道慶寺（花泉町）にて開催（常住院の長生ほか総代出席）
十四日　落雷により山内電話施設故障。被害少なからず。
十五日　日光輪王寺職員研修旅行一班来山。
十六日　葛川参籠（真珠院澄順、瑠璃光院康純　～二十日）
十七日　清衡公御月忌　胎蔵界曼荼羅供　常の如し。月例法話の会（講師　金剛院澄元）
十八日　東北地方建設局長坂本忠彦氏ほか来山。
二十一日　貫首、一関市高齢者大学講演（市文化会館にて）。
二十二日　日光輪王寺職員研修旅行二班来山。
二十四日　月例報告会　ギリシャ大使来山、貫首挨拶。
二十五日　秋篠宮殿下お成りお出迎え総リハーサル。藤沢町ボラントピアセンターふれあい行事三〇名来山
二十八日　秋篠宮殿下同妃殿下お成り
二時　金色堂前御着。貫首ご挨拶、ご案内。金色堂、経蔵、旧覆堂、本堂御拝観後、本坊御居間にて御休憩。
二時五十分　御発ち。参道にて町民、観光客大勢日の丸の小旗で歓送迎。

◇八月

一日　月次大般若会
三日　一山協議会
七日　結衆、夏安居（開山堂にて、～十三日）
八日　連日の豪雨にて北上川増水、高館橋通行不能。
十日　梵焼供　結衆　常の如し。町内教職員研修会（講師　円乗院邦世）
十一日　浄土宗岩手支部代表、阿波之介舎利塚墓参。
十二日　帰省客多く、本日より拝観時間延長（～十五日）

十四日　第十九回中尊寺薪能　能「源氏供養」　狂言「鐘の音」　半能「実朝」　酒田三十六人衆代参（上林英樹氏）。境内遺構調査並びに遺物整理のため金丸義一氏、助手ほか来山（～二十七日）。
十六日　第三十一回大文字まつり。雨天にて戦没者追善法要、並に先祖代々精霊供養本堂にて奉修、引き続き大文字送り火採火法要奉修。
十九日　日光薪能を観能研修、一山四名、喜桜会二十一名。
二十日　恒例毛越寺施餓鬼会（三老大徳院賢有出席）
二十二日　平泉祭幹事会（澄元・邦世・慎有出席）
二十三日　大施餓鬼会御逮夜（本堂）結衆終日法要準備。
二十四日　大施餓鬼会。併せて、阪神大震災死没者追善供養奉修。
二十五日　日本機械学会東北支部大会にて貫首講演（一関高専）
二十六日　岩手県南腎臓患者友の会総会（衣川荘　講話円乗院邦世）群馬総社部檀参。月例報告会
二十八日　鎌倉彫展作品搬出（管財澄元）。
二十九日　永福寺遺物展資料搬入（同）。文化庁文化財保護審議会専門委員龍居氏来山（円乗院邦世案内）。
三十一日　町内竜玉寺施餓鬼会（三老大徳院賢有出席）

◇九月

一日　月次大般若会　瀬見温泉亀割観音堂例祭法要（二老常住院高圓出張）
二日　藤原清衡公平泉到達祭。江刺市より清衡公一行一八〇名、本堂、金色堂参拝。法要、一山出仕。
三日　泰衡公御月忌　金剛界曼荼羅供　常の如し。平泉祭　御神輿渡御。観自在王院跡出発。東京深川富岡八幡宮ほか県内三市町の御神輿が参道を登り、二時、金色堂前到着。金色堂法要、一山出仕。（担ぎ手七〇〇人、観客三千）。
五日　山陰安来市清水寺様檀参来山。
七日　鈴木常俊日光輪王寺門主晋山式（貫首・執事長出席）
十日　紫波町五郎沼薬師神社例大祭（二老常住院高圓出席）
十二日　秋田自衛消防連絡協議会一行、中尊寺消防施設研修（管財部対応）
十五日　紫波町蜂神社例祭（三老大徳院賢有出席）
十六日　山内願成就院本堂上棟式。
十九日　赤堂稲荷例祭

浄財御奉納者 御芳名

平成六年

十　月　福島県　押部様　五萬円
南総教区長光寺・光明寺様　三萬円
東京都　傳通院様　八萬円
十一月　きさらぎ会様　三萬円
栃木県　松下かづえ様　五萬円
十二月　横浜　大聖院様　三萬円

平成七年

一　月　丸卓建設㈱様　五萬円
えさし藤原の里様　拾萬円
二　月　電気通信共済会東北支部様　拾萬円
四　月　全国犬友会様　五萬円
浅草本龍院様　五萬円
平泉郵便局様　五萬円
一関信用金庫平泉支店様　三萬円
鎌倉大仏殿高徳院様　五萬円
五　月　福島県　味原静枝様　三萬円
東京都　国井高子様　三萬円

五　月　花王石鹸㈱会長様　三萬円
解脱会　東京第三者区様　五萬円
六　月　南長野仏教会様　三萬円
北総教区　泉養寺様　三萬円
浄土宗 東京教区江東組青年会様　三萬円
武原はん様　拾萬円
鎌倉　野尻政子様　三萬円
毛越寺様　拾萬円
八　月　浄土宗岩手支部様　五萬円
奥州えさし 藤原まつり実行委員会様　三萬円
九　月　東京都富岡八幡宮 神輿総代連合会様　五萬円
山陰教区　清水寺様　五萬円
東北電力労組本部様　三萬円

赤堂稲荷鳥居奉納

盛岡市　㈲アンバー　佐々木　誼　様
盛岡市　第一商事㈱　柴　田　義　春　様

不動尊祈願

平成六年

四　月　一関市　蜂谷優子様　五萬円
五　月　宮城県　佐藤敏雄様　三萬円
七　月　藤沢市　矢鋪雅子様　三萬円

平成七年

一　月　一関市　山平様　三萬円
金成町　㈲金成工務店様　三萬円
一関市　㈱精茶百年本舗様　三萬円
平泉町　一関信金平泉支店様　三萬円
平泉町　川嶋印刷㈱様　三萬円
衣川村　スキルグリスター 代表取締役　千葉繁様　三拾萬円
四　月　青森県　笠原山不動院代表 小笠原喜世様　五拾萬円
七　月　一関市　一関商工高校様　三萬円
八　月　川崎村　佐藤卓三様　拾萬円

後記

▽阪神大震災、地下鉄サリン事件、そしてオウム真理教幹部逮捕と次々に明らかになる非人間的行為。治安に対する信頼も失墜。景気は低迷、政治への無関心と、すべてが先行き不透明な状況。
▽不動堂に納められる護摩木にも「世の中が安定しますように」「就職できる社会を」「皆が幸せになれますように」といった切実な願いが。
▽宗教法人法改正の是非を論ずるより、宗教が問われるのが先か。

（編集 佐々木邦世）

中尊寺〈寺報〉『関山』第二号
平成七年（一九九五）十月一日
発行 中尊寺（執事長 菅原光中）
〒029-41 岩手県平泉町字衣関二〇二
編集 中尊寺仏教文化研究所
印刷 川嶋印刷㈱

発行　中尊寺